

啄木と小静

小林 芳弘

はじめに

啄木ゆかりの釧路の芸者は三人いる。最も有名なのが小奴であり、彼女については古くから語られてきている¹⁾²⁾。他の二人、市子と小静は小奴ほど知られておらず、これまでほとんど注目されてこなかった。著者は、小奴以外の二人の芸者もまた、啄木とかなり親密な関係にあったとの考えから、三人のうちで最も若かった市子について深く追求した結果、数多くの新資料を発見することができた。そこで、これらを元にして「啄木と釧路の芸妓たち」を著した。この本の中で著者は、明治41年2月20日夜、啄木と市子は一夜を共にしながら、啄木は日記にそのことを記さなかった可能性が極めて高いことを指摘した。³⁾さらに、その後の二人のかかわりについても詳細に調査し明確にした。

一方、三人のうちで最も年増の芸者、小静についても、啄木日記、書簡、釧路新聞記事等をもとにして、啄木との関係を細かく分析した。また、啄木が釧路を離れる引き金になったとされる、啄木と小奴の「離間策」とよばれるものが実際にあったのか。そして、そのことに小静がどのようにかかわっていたかについて、釧路時代の啄木の行動日程と金銭の収支を細かく調査することによって論じた。しかしながら、啄木と小静の関係については、決定的な証拠が足りず、いくつかの不明な点が残されていた。

今回、やはり啄木ゆかりの釧路の女性である梅川操を調査する過程で、思いがけず啄木と小静の関係を考えるうえで不可欠と思われる資料が見つかった。第一の資料を最初に見た時、少し気にかかりながらも、それほど重要な記事だということに思いがよらず、見すごしてしまっ

た。だが、二番目の記事を見て、最初の記事を思い出して元に戻って読み直し、ていねいに調査を始めた。その結果、二つの記事が啄木と小静の関係を論ずる際の資料として、極めて重要なものであることが判明した。ここにその資料を明らかにし、いくつかの考察を加えたので報告する。

本文に入るに先だち、本研究に際していくつかの貴重な御示唆をいただいた、盛岡大学短期大学部幼児教育科長、金野静一教授に対して深く感謝の意を表する。

1. 啄木と小静の出会い

啄木が、釧路で最初に気に入った芸者は、小静である。明治41年1月21日に釧路入りした啄木が、料亭通いを始めるのは、1月24日に㊦喜望楼にあがってからである。小静はこの店の抱え芸者であったが、この日はまだ啄木と対面していない。続く2月2日に、釧路新聞の新築落成式の大宴会が喜望楼で催された。啄木は主筆の日景から羽織袴を借りて、先発隊として会場に出むき準備をしていた。その日の披露宴の出しものである「謎々の福引」作りに徹夜までして張切っていた。4時に始まった大宴会には、70名の来賓が集まり、芸妓は14名であった。啄木は福引や会の進行のために大忙しだったとみえ、14名いた芸者のことは日記に何ひとつ書いていない。9時に散会して、小新の部屋で飯を食べて、11時に帰ったとのみ記している。2月4日に釧路新聞に掲載された披露宴の様を伝える記事には、

「鹿島屋の市子と丸コの切子が鶴亀の舞あ
でやかに拍手暫らく鳴りもやまざりしが盃の

数重なるにつれて其所にも此処にも快き気焔を聞けり。」

とあるが、ここにも小静はあらわれてこない。小静もいたはずなのだが、あまり目立たなかったのであろうか。

小静が啄木日記に登場するのは、2月7日のことである。

「喜望楼の五番の室は暖かであった。芸者小静よく笑い、よく弾き、よく歌ふ。陶然として酔ふて十二時半帰宿。喇叭節が耳について居て眠を妨げられた。」

啄木が喜望楼へ上がったのは、これが三度目である。しかし、この日は前の二回とは事情が幾分か違っていった。最初は白石社長の招待であったし、二度目は新聞社の社屋落成披露宴であった。今回、初めて身銭を切った。

函館の弥生小学校で代用教員をしていた時の同僚、遠藤隆を接待するためであった。彼は前年10月に函館を離れ、釧路第三小学校に勤務していた。釧路で最も成績が悪く醜聞が多いと噂される第三小学校の内情を聞き出そうとしたが、遠藤の口は固い。そこで、酒を飲ませて話させるために喜望楼へ連れて行った。

金は、1月26日に白石社長からもらった銀側時計を質に入れて作った。懐中には1円なにかししかなかったもので、そうするより他なかったのであろう。借りた金は、5円50銭であった。

五十幡熊五郎著「釧路の粹界」⁴⁾によれば、当時、喜望楼には小住、小新、小芳、小福、小静、桃子、助六、初子、切子、小若といった芸者がいた。2月7日は、啄木はよほど小静のことが気に入ったらしく、宮崎郁雨あての長い手紙の中に次のように認めている。

「此処で一寸説明しておくが、釧路の芸者は約四十人、見番は先月新らしく出来たが、極めて不振で、皆料理店には内芸者が抱えてある、㊦には大小十一人のペンペン猫が居る、呼んだのは其十一人のうちでチョイト名の売れてゐる小静といふので、三面先生のノートによると年齢二十四、本名尾張ミエ、小樽と札幌でやっている新派俳優朝霧映水の妹だ、万歳事件と、小樽で一度俳優に奢られた時と

当地へ来てから社長に一度引張られて此㊦へ行ったのと、先日の宴会と、昨夜と、僕が生れてから芸者なるものに接したのは僅か此五回に過ぎぬ。そして其五回目には自分が主人公になって行ったのだから、或は随分急速の進歩かも知れぬ、茲に至っては石川啄木も天下の滑稽を解したものと云はねばなるまい。サテお銚子は六本許り倒れた様であった、僕と客と芸者と共に大部酔った、無論酔はぬ先に目的の話は充分聞いて了った、小静はよく弾きよく歌った、客もまたよく飲み歌った、僕はよく笑ひよく酔ふた、小静は僕に惚れたといふ、僕は、宴会以来豆ランプと綽名のついた禿頭を叩いて、モ少しでナツタナツタ節を歌ふ所であった、君、新聞記者は人から悪い顔をさせられる事が滅多にないものらしい、帰ったのが十二時半、喇叭節の節が耳について居て、眠を妨げられた、〈中略〉昨夜小静の歌った歌にも『浮世渡るは唯胸一つ、馬は手綱で船は舵』といふのがあった。

〈中略〉着換がないのに襟が汚づいて、冷たいやら気持が悪いやら話にならぬので、ハンケチを首に捲いた所が、昨夜小静に笑はれた、『禿頭に似合はぬ』と云って。」(2月8日書簡)
非常に長い手紙であるが、二ヶ所の中略(著者による)部分をはさんで繰返し小静の名が登場することに注目したいと思う。

2. 大胆な小静の行動

次に二人が顔を合わせるのは、2月9日である。この日は日曜日のため新聞社は休みだが、午後5時から梅月庵というそば屋で、釧路の新聞記者の月次会合があった。7時半に散会し、啄木は3～4人で連れだつて宝来座という劇場へ、田舎回りの芝居を見に行つて小静に会った。

「芸者小静が客と一緒に来て反対の側の棧敷に居たが、客を帰して僕等の方へ来た。三幕許り見て失敬して古川君と小静と三人で、梅月庵といふ小集の際の会場であった蕎麦やでそばを喰ふ。酒二本。古川が芸者論やら新聞論を初めたので坐がさめた。帰つて枕についたのが十二時半。」(2月9日啄木日記)

情報網の発達した現代では、居ながらにして世界中の政治家や芸能人の消息を知ることができる。テレビもラジオもない時代はどうだったのだろうか。明治時代の新聞の三面には、多数の芸娼妓の消息記事や品定め記事が掲載されていた。特定の愛人ができたといっちは騒がれ、妊娠したりすれば、必ず大げさに書きたてられた。釧路新聞の場合も例外ではない。その記事にカラーグラビアを添えたら、現代の週刊誌の芸能ニュースやスターの噂あれこれと何ら変るところがない。テレビやラジオが普及する前は、日本全国のどの地方都市にも芸者がおり、彼女たちはその地に咲いたスター的存在であった。それぞれの地域に固有のタレントが息づいていた訳である。芸者のプロマイドが発売されたばかりでなく、芸娼妓の写真と紹介文が載った本まで発行されていた。釧路では、明治41年1月に、五十幡熊五郎による「釧路の粹界」が出版され、その中に小静をはじめ小奴、市子など、当時釧路にいた芸者はみな登場する。また、当時の芸者は、普段料亭に顔を見せない女性や子どもの前でも、年に何回かは歌や踊りを披露していた。芸者による慈善演芸会や、日頃鍛練を積んでいる稽古事の発表会である温習会の予告や批評記事が、新聞の三面に頻りに掲載されている。したがって、当時の芸者は、普段料亭に出入りしない人たちにまで知られている、地方の有名人であった訳である。これらのことを考慮すれば、2月7日の小静の行動がいかに目立ったかが想像できよう。啄木たちよりも遅れて宝来座に入って来た小静は、やがて彼らの存在に気づき、いっしょに芝居を見に来た客を先に帰してしまっただけで、反対側の棧敷に移動してきたというのだから相当である。第一いっしょに芝居見物に連れ立ってきた客もいい気持はしなかっただろう。釧路は当時、人口1万5千人ほどの街である。そこで1・2の料亭の抱え芸者で、いくら売れっ子といえど、この夜の彼女の行動はかなり大胆だったと判断することができよう。啄木が宮崎郁雨にあてた書簡に書いた通り、小静が啄木にほれたというのは本当だったに違いない。

翌日、北東社主催の慈善演劇会を觀に釧路座

へ行った時の様子を、啄木は次のように記している。

「記者席の向ふの棧敷には、鹿島やの市子や㊦の初子が来て居て、其処へ行く男の方が芝居其物より多くの人の注意を牽いて居た。」

(2月10日啄木日記)

芸者のいる棧敷へ男が行くのでさえ、多くの人の注意をひくのである、派手な着物で着飾った芸者が、今までいっしょにいた男と別れて、他の男の所へ移動したりしたら、特別目立つに決っているだろう。

案の定、小静と芝居を見た次の日、啄木が会社するとすでに二人の噂は広まっていた。早速ヒヤカされる。

「目がさめたのが十一時。驚いて飛び起きて、朝飯もソコソコに済まし、社にゆくと不取敢昨夜の話が出た。安くないと云ふ。いや高くもないと云ふ。こんな事から段々釧路の事情が解って来る。」(2月10日啄木日記)

3. 2月9日夜の啄木の睡眠時間

日記によれば、2月9日夜、小静と芝居を觀たあと、梅月庵に寄って酒を飲んでそばを食べ、啄木が下宿に帰り床についたのが12時半である。翌10日、目がさめたのが11時と記しているが、この部分について、著者は以前から疑問を抱いていた。「啄木と釧路の芸妓たち」の一節をそのまま引用する。

「ところで、啄木の起床時刻だが、昨晩十二時半に枕について、翌日目醒めたのが十一時というのは、ちょっと遅すぎないだろうか。

『日記』をそのまま読めば、全く気づかずに十一時まで寝ていたことになる。前夜飲んだ酒は三人でわずか銚子二本である。二日酔いとも考え難い。十時間半も寝ていたにしては目醒めが悪すぎる。実際には、もっと遅く下宿に帰ったかなにかで、睡眠時間は少ないのではないかという気がしてならない。」

2月7日に遠藤隆と喜望楼へ上がり、初めて小静と対面した時には、三人で酒が6本であった。啄木もかなり酔った様子で、12時半に下宿に戻るが喇叭節が耳について眠りを妨げられた

ということなので、実際に眠った時間は多くないと思われる。それでも、翌朝は10時に起きて入社し、ひと仕事をしてから昼には外出して、吉野白村を釧路へ呼び寄せる工作までする余裕があった。これに対して、9日夜は、帰って枕についたのが12時半であるから、7日夜よりはるかに睡眠時間が長かったように見える。それなのに、10日朝がこれほど目醒めが悪いのはなぜなのか。「啄木と釧路の芸妓たち」を著した時点では、これを説明する決定的な資料がなかった。そのため疑問形で終わってしまっていた。

4. 小静の身の上ばなし

啄木と小静の関係で疑問な点は、他にもある。2月10日の啄木日記の中に、小静自身が語ったと思われる自分の身の上ばなしが出てくる。これを啄木が、いつ、どこで、どのような状況で聞いたのかが明確でなかった。

「小静の事を少し書いて置かうか。彼自身の語る所では、生れは八戸、小さい頃故郷を去ったといふ。両親は今此町に居て、姉なる小住と二人で喜望楼の抱妓になって居るが、家には二歳になる小供があるとの事、一昨年から昨年へかけて半年許りも脳を煩らうたと云ふが、成程其目付が、何処か恚うキラキラして居て、何となき不安を示して居る。そして、札幌の大黒座で堀江四郎、川上薫、稲葉喜久雄等と共に壮俳になっている朝霧映水と云ふのが、彼女の兄だと云ふ。兄は声がよくて、且つ三味線や唄は、妹が師匠から稽古するのを、聞いて居ただけに覚える程、芸にさとい方ださうな。……人の話によると、彼女の二歳になる小供といふのは、雲海丸（運開丸？）の船長とかの間に出来たのださうなが、今㊦の芸妓十人中、芸にかけては小静の右に出るものなく、又顔から云っても助六の次であるといふ。そして脳を悪くした為めに、時としては不意に卒倒する事があるさうで、今、知れ渡って居る弗且は笠井病院の万沢医学士と、モ一人は仲買商の富士屋と云ふ男なさうな。又彼女自身は、北東新報の社長たる西嶋君から嘗て結婚を申込まれたが、断って了っ

たので、その所為か北東紙は常に悪感情を持った記事を掲げると啣して居た。」

上に引用した日記の内容は大きく二つの部分に分類される。すなわち、小静自身から直接聞いたと考えられる部分と、彼女以外の人間から聞いたと判断される部分である。前者に相当するのは、2行目の「生れは八戸……」から14行目「芸にさとい方ださうな。」までと、23行目「北東新報の……」から26行目「記事を掲げる」までである。一方、後者に相当すると思われる部分が14行目、「人の話によると」に始まる「彼女の二歳になる小供……」以下、23行目「富士屋と云ふ男なさうな。」までである。したがって、2月10日日記の「小静の事」は、小静から直接聞いた話の間に、彼女以外のところから収集した情報をもとにした内容をはさみ込む形で構成されていることがわかる。小静以外の誰から聞いたのかは不明である。2月8日の時点では、小静の年齢と本名、朝霧映水の妹だということしか知らなかった訳であるから、数日の間に、啄木の側も小静情報を積極的に集めたということになるろうか。

さて、問題の2月10日啄木日記に二ヶ所に分かれ記されている、小静自身の口から発せられたと解釈できる身の上ばなしは、いつ、どこで、どのような状況でなされたのであろうか。詳しく検証してみよう。

2月10日の日記が記されるまでの間、二人が会ったのは二回だけである。前述した通り、一回目は2月7日夜、元同僚の遠藤隆と二人で喜望楼五番の部屋にあがり、初めて小静に直面する。宮崎郁雨にあてた手紙の様子から三人が陽気に騒いだという雰囲気伝わってくる。したがって、しんみり身の上ばなしをしたとは思えない。しかも、啄木同様、釧路第三小学校の教員である遠藤隆もまた小静とは初対面であったと考えられ、そのような相手にいきなり自分には子供がいることや、脳を煩ったなどという告白をすることが、営業上得にならないことは明白であろう。そうだとしたら、2回目の出逢い以外に、身の上ばなしを聞く機会はないことになる。

二度目に二人が顔を合わせたのは、宝来座である。新聞記者の月次小集のあと、3～4人で林一座という田舎回りの芝居見物に行ったところ、あとから客といっしょに来た小静が、客を先に帰して、啄木のいる反対側の棧敷に移ってきたことはすでに説明した通りである。芝居見物の最中に、3～4人の男性のいるところで、身の上ばなしをしたとも考え難い。そうだとしたら、芝居見物の途中で切りあげ、古川と小静の三人で再度梅月庵へ行って、そばをたのみ酒を飲んだ時だろうか。

古川萍水は、釧路実業新報の編集主任であった。この新聞は、釧路実業調査会の機関紙であり、明治41年2月20日に初号を出した²⁾ということなので、この時期は新しい新聞を発行する準備期間であったと考えられる。この新聞社の所在地は浦見町で、発行部数が1,000部、釧路新聞社理事の佐藤国司が主幹を務めていた。北東新報に対してはライバル意識があり、後日、取り潰しのための記者引き抜き工作に手を染める啄木も、この実業新報に対しては、さほど警戒感がなかったかもしれない。

日記には、「古川が芸者論やら新聞論を初めたので坐がさめた。」と書いている。古川は小静を前にしてかたい話を始めた訳であり、いかにもその場の雰囲気になじまなかったもので、古川の存在が邪魔だという風に読めるのではないだろうか。啄木と小静は前回会って意気投合し、もっと華やいだ気分だったのかもしれない。そんな状況の中で、もし小静が身の上ばなしを始めたら座はもっとしらけることになるだろう。したがって、ここでもしんみりと小静が身の上ばなしを語ったとは考え難い。

日記はこのあと、「帰って枕についたのが十二時半。」となっており、翌2月10日の日記へと続く訳である。以上のように考えると、2月9日も小静自身の口から直接、啄木が身の上ばなしを聞く機会はなかったことになってしまう。

5. 釧路新聞記事

啄木が釧路にいたのは、明治41年1月21日から4月5日までの76日間である。釧路時代の啄

木を語るには、この期間のことを詳細に調査する必要があるのは勿論だが、それだけでは十分でない。啄木ゆかりの人々は、彼が釧路を訪れる前も、そして釧路を離れたあとも、そこに住んでいた訳である。このような考えにたつて、76日間の前後を調べた結果、多くの新しい資料を発見することができた。それを元に著者は、「啄木と釧路の芸妓たち」を書いた。

今回もまた、啄木が釧路を去ってから約10日後の4月15日付釧路新聞三面に、奇妙な記事が掲載されているのを発見した。

「▲度々新聞に御厄介になる某蕎麥屋程魔窟屋はありませんよ僕が先晩一人の友と同伴で午後十一時頃同屋に上り大まい八錢を投してカケ二つを注文して居る内隣り座敷より來たる奇聲に思はず耳を敲たてた處がイヤハヤ英露交戦の最真中であつた借問す釧路警察署は何を爲して居るだろう豈敢盲目ではありませんでしょうね（吃驚生）」

この記事一つだけであれば、そのまま見すごしてしまっていたかもしれないが、5日後の4月20日釧路新聞の三面に、またしてもそば屋の記事が掲載されたのである。最初の記事は、「はがき集」という欄の投書記事のうちの1つなので、恐らく読者から寄せられたものである。ところが、20日付のものは投書記事ではない。

「●蕎麥屋から朝歸り 客が泥酔して倒れたものならば其旨所轄警察署に届け出て兎も角もすべし料理屋蕎麥屋は断じて旅人宿に非らず等と今更鹿爪らしく野暮を言つた處仕方なし何事も公然の秘密其處が夫れ世の中が甘く出きているものなる可けれど斯う手離しては……と思はれしは再昨日のこと當港は某蕎麥屋より朝歸りの二人連れ確か件の客は旅先きの耻をかき捨てて行く輩ならむて見てあれは道順は言はぬが花を手折つた昨夜の品定めしながら角大旅館にお歸りの聲に迎いられて這入り行きしとなん」

4月15日付きのはがき集に寄せられた投書記事が掲載されてまもなく、そば屋から朝歸りする二人の男を見かけた釧路新聞の者が記事にし

たものであろう。啄木が釧路を離れた直後で、彼の後任として送り込まれた小国露堂もまだ到着していない時期なので、佐藤衣川か上杉小南の筆によるものと想像される。

4月15日付はがき集に掲載された投書記事の意味するところは、「最近新聞紙上で話題になっているあるそば屋に入ったら、隣の部屋から男女の奇声が聞こえてきた。そば屋の座敷をラブホテル代りに使わせておくことを警察は黙認するのか」といったところだろうか。

一方、4月20日の記事は、後半で二人連れの旅行客がそば屋から朝帰りしたことを報じたこと以外、意図したところが良くわからない。しかしながら、この記事は、15日の投書記事のような事実が、公然の秘密として行われていたことを裏づける証拠として重要である。この二つの記事を目にするまで、当時のそば屋がラブホテル代りに使用されていたことなど、予想がつかなかった。そば屋からの朝帰り記事をながめているうちに、著者は、二つの釧路新聞記事が、これまで不明であった啄木と小静の関係を解くカギになりそうだと気づいた。大きな疑問点は2つあった。一つは、2月9日夜の睡眠時間であり、二つ目は、小静の身の上ばなしを聞いた場所と日時である。これらの疑問を同時に解決するカギをそば屋が握っていると思われる。

そこで、一つの仮説をたてて日記を読み直してみることにした。そうすることにより、二つの疑問が解けてうまく説明ができるようであれば、その仮説はより真実に近いと考えて良いからである。

2月9日の日記には、「古川君と小静と三人で、梅月庵といふ小集の際の会場であった蕎麥やでそばを喰ふ。酒二本。古川が芸者論やら新聞論を初めたので坐がさめた。」とある。ここまではいいとして、その後、古川は一人だけ帰って啄木と小静は梅月庵の一室にそのまま居残ったのではないか。そして、この日の日記の最後の「帰って枕についたのが12時半。」という部分は事実と違うのではないか。そこで、啄木と小静がそば屋の一室で一夜を共にしたと仮定して、再度日記を読み直してみる。

まず、啄木の起床時刻だが、「目がさめたのが十一時。驚いて飛び起きて、朝飯もソコソコに済まし、社にゆく」という状態は、朝帰りに近いと想定すれば、当然起り得ただろう。しかも、芸者小静と宝来座を出たことを周囲が知っており、大幅に出社が遅れたことを含めて、「不取敢昨夜の話が出た。安くないと云ふ」ひやかしにあっていないのに対して、啄木の側は否定しようとしていない。「こんな事から段々釧路の事情が解って来る。」と書いており、むしろ、ひやかされることを喜んで受け入れている様子さえうかがえる。

2月10日の啄木日記に記された、小静自身の口から発せられたと考えられる身の上ばなしは、いつ、どこで、どのような状況でなされたか、不明であった。それまで2回しか会っておらず、いずれの場合にも、啄木以外の男性が同席していることを考えると、身の上ばなしを聞く機会があったように思われず、解釈が難しかった。しかし、2月9日の啄木日記の最後、「帰って枕についたのが十二時。」というくだりが事実と反しており、実際にはこの時間に帰っていないと考えれば、啄木と小静が二人きりになって身の上ばなしをしんみり聞く時間がたっぷりあったことになる。そうすれば、2月10日日記の身の上ばなしの謎は解けることになる。

6. 「紅筆便り」の小静記事

2月11日は火曜日だが、紀元節のため新聞社は休みだった。この日も、夕方㊦喜望楼へ行くが、小静はすでにお座敷がかかっていたため、助六を呼んだ。啄木は満足しなかったようで、早々に切りあげ、釧路座で行われていた北東新報社主催の新夕張炭山事故に対する義損金集めのための慈善劇へ出かけた。そこで思いがけず、啄木は小静と再会する。お座敷のはずの小静がもうすでに釧路座へ行っていたのか、あとからやってきたのかは、明らかでない。小静は一人ではなかった。客といっしょだった。そのことを、啄木は早速、釧路新聞の記事に書いた。

「紅筆便り」は、啄木が在釧中に15回連載され、そのうちの前2回と最後の1回を除いた13

回が啄木の筆によるものと考えられている。2月13日は、啄木の手で「紅筆便り」が書かれた最初の日である。

「海に千年山に千年と辻はまいらねど世の荒海に骨まで洗はれて棚なし小舟たよりなく某といふ汽船の船長様に救はれた事もある小静の君世の中の酸い甘いは悉く嘗めつくして日本一の山の頂きにも登り蚊竜ひそむ万沢の奥までも探りし身ながら流石に今年の寒さは七年目動かぬ撥の手を火鉢の縁に打ちつけて辛くも温めし白魚の指今更乍ら此道のつらい事知り待りぬと啣ち遊ばせしも昨日の事にて大橋の準禁さんと芝居見物などは陽気の加減にも候べきか斯く辻に前後をお忘れなされては姐御の顔が潰れると誰やら額に青筋張りて奮激いたし候ふとの事誠に御最千万の御心配と私の所夫も申居候」

2月10日の啄木日記の小静の経歴に登場する人物がそれとわかるようにそっくり出てくる訳である。汽船の船長様＝雲開丸船長、日本一の山の頂き＝富士屋、万沢の奥＝万沢医学士という関係である。13日付新聞記事の原稿は、前日の12日に書いているはずである。したがって、「紅筆便り」の中の「昨日の事にて大橋の準禁さんと芝居見物などは……」というの、11日の釧路座の慈善劇に小静も来ていたことの証拠である。11日の啄木日記には、釧路座で小静と会ったとは記されていないが、「紅筆便り」記事から二人が顔を合わせていることが判明した。二度目に宝来座で会った時のように、またいっしょに来た客を帰して、啄木のいる棧敷に来れば啄木は満足したのかもしれないが、今回は小静はそうしなかった。だから、啄木は小静のことを記事にしたのかどうかは、わからない。「紅筆便り」で啄木は一体何を意図していたかについては不明な点があるが、ただ明確なことが一つある。「紅筆便り」は、2月10日啄木日記に出てくる小静以外の人間から得た情報と、11日に啄木が釧路座で直接目にしたことがらにもとづいていることである。小静の口から直接聞いた事は、決して記事にしていない。子どものこと、脳をわずらったこと、北東新報の西島

社長に求婚されたことは書かれていない。このことをどのように解釈すれば良いのか。新聞記者としての使命より、小静との信頼関係を大切にしたいというべきだろうか。それ以上のことは、記事にしにくいと啄木を感じる何かがあったのかもしれない。これらのことを考慮すると、2月10日の啄木日記に書かれている小静自身の口から発せられた身の上ばなしを、啄木はプライベートな関係で知り得た情報と判断していたということになるのではないか。

7. 小静その後

釧路座で小静を見かけたことを、「紅筆便り」に書いた日の夜、啄木はまた同僚の上杉小南をひき連れて、㊦喜望楼へ出かけた。

「二階の五番の室を僕等は称して新聞部屋と呼ぶ、小玉と小静、仲がよくないので座は余りひき立たなかったが、それでも小静は口三味線で興を添えた。煙草が尽きて帰る。帰りしなに小静は隠して居た煙草を袂に入れてくれた。」(2月12日啄木日記)

白石社長の招待で最初に㊦へ上った1月24日に、啄木は小玉に会っている。したがって、小静よりも早く顔見知りになっていたはずである。小玉は当時20歳であった。小静の方が4歳上の姉さん格だが、啄木のタバコが切れたのを知りながら、その場ではすぐに差出さず、帰り際にそっと袂に入れるという細かい気配りを見せている。小静は、出逢って間もない啄木への思いを小玉に知られたくなかったのか。元々、小静という女性の性格がそうさせたのだろうか。2月9日の宝来座での大胆なふるまいとは、実に対照的で、どのように考えたら良いのか迷ってしまう。だが、2月17日に小樽の藤田・高田両少年にあてた書簡では、小静のことを啄木は次のように表現している。

「芸妓小静は下町式のロマンチック趣味の女にて鏡花の小説で逢った様な女也。」

啄木と小静の関係が頂点に達したのは、2月9日から12日までの非常に短い期間であった。3月23日の啄木離釧の大きな原因の1つだと考えられている、「小奴との離間策」にも小静が

関連しているが、3月の時点では、啄木の興味の焦点は小奴に移っていた。

日記や、宮崎郁雨他の人にあてた手紙の中であれだけ好意的に書き、小静に会うために何度か通いつめた啄木の足が、喜望楼からバツタリと遠のいたのは、小静よりも若い、当時釧路で最高の売れっ子芸者市子に心ひかれたからであった。

8. 日記に事実を書かなかった理由

啄木と小静は2月7日に出逢い、たちまち意気投合した。宮崎郁雨らにあてた書簡には、小静が自分にほれた言っているように書いているが、これは必ずしも啄木ひとりの勝手な思い込みとは言えないだろう。特に、2月9日の小静のふるまいを見れば、啄木の誇張した表現とは考え難い。一面では慎み深く、ひかえ目な性格の女の大胆な行動ゆえに、よけいに小静の積極的な意志が感じられる。男女の愛は、男の側がいかに一方的に相手を好きになって口説いたところで、女がそれを受け入れなければ成就しない。2月9日は、小静が完全に主導権を握っていた。

啄木日記をそのまま読むと、大きな二つの疑問が生じる。すなわち2月9日夜から翌日までの啄木の睡眠時間と、2月10日の日記に記された、小静の身の上ばなしを啄木が聞いた日時と場所の問題である。これらの二つの疑問は、今回新たに釧路新聞三面から発見された二つのそば屋に関する記事を手がかりにして、2月9日、啄木と小静がそば屋の一室で一夜を共にしたと考えることにより氷解する。大胆な仮説であるが、そのように考えることで、前後の関係がより明瞭に説明ができるので、それがより真実に近いと言うことができよう。

ところで、啄木は小静と一夜を共にしたことを、なぜ日記に記さなかったのだろうか。芸者との関係を日記に記さなかったのは、今回ばかりではない。これより約10日後の2月20日夜、啄木は小樽日報の特派員として釧路を訪れた沢田信太郎が、下宿に来ることを知りつつ、市子と一夜を共にして朝帰りした可能性が極めて濃

厚であることを、著者は「啄木と釧路の芸妓たち」の中で指摘した。この時にも、日記には、「午前3時半枕に就く」と書いており、朝帰りしたことにはなっていない。今回の小静の件とあわせて、啄木日記が事実と異なると思われる箇所は二つ目であるが、それがいずれも女性に關係したものであることに注目する必要がある。

妻以外の女性との関係が、日記から知られることを心配したのであろうか。ところが、そうとも考えにくい例がある。明治42年に記されたローマ字日記には、浅草の娼婦との関係が相手の名前入りであからさまにされている。同じ啄木日記でありながら、釧路の二人の芸者と浅草の娼婦のとりあつかいに見られるギャップを、どのように解釈したらよいであろうか。日記に妻以外の女性と性交渉があったことを明らかにしなかったのであれば、ローマ字日記の中でもそのような場面は表現を変えたはずである。

娼婦は身を売るのが商売である。しかし、芸者は違う。芸者は歌や踊りそして三味線などの芸を売るのが商売である。しかも当時の芸者は、各地方都市を代表する芸能人であり、街中で知らぬ人のないくらいの有名人であった。芸者には、名があったのである。啄木には芸者との関係は互いに仕事を離れたプライベートなものだという意識があり、自分のこともさることながら、むしろ、日記が他人に読まれる事態が生じた時に、相手の名前が世間に知れることを恐れたのではないだろうか。

啄木は自分の死後、日記が公開される可能性を予測して、節子に焼くように命じていたという。しかし、紆余曲折の末、日記は保存されやがて出版された。このお陰で、啄木研究は飛躍的に進展したことは間違いない。ただ、その際の啄木日記をもとにした研究には、「日記には真実が書かれている」という暗黙の前提がなかったのだろうか。

日記は私的なものである。何を書くのも自由であり、真実を書かなくてもいっこうに構わない。啄木自身が、日記にすべて本当のことを書いたなどということ、どこにも言っていない。今回明らかになった箇所は、啄木日記全体から

見ればほんの一部であり、とるに足りないと思われるかもしれない。しかし、一部であろうとも事実と異なる内容のものが存在する可能性がある以上、今後の日記を元にした研究には細心の注意を払う必要があるのではないだろうか。

まとめ

これまで、あまりとりあげられることのなかった小静について、啄木との関係を明らかにする目的で、出逢いから二人が親密になるまで、そしてその後を細かく検証した。その結果、今回新たに発見された釧路新聞記事を元に考えると、

これまで疑問として残されていた啄木日記の中の謎が解けることが判明した。啄木は小静と一夜を共にしたことを日記には書いていないと考えられるため、その理由について考察を加えた。

文献

- 1) 啄木釧路の七十六日 宮の内一平 旭川出版社
- 2) 小奴しぐれ 宮の内一平 旭川出版社
- 3) 啄木と釧路の芸妓たち 小林芳弘 みやま書房
- 4) 釧路の粹界 五十幡熊五郎 白陽堂
- 5) 「釧路新聞」と石川啄木(一) 福地順一 原始林
1979 8月号